

沈烈毅：詩とは、語られない部分に宿る



沈烈毅，1969年、杭州生まれ。中国雕塑協会理事、浙江省雕塑研究会副会長、中国美术学院雕塑与公共艺术学院副院长を務める。

自然は、語らずしてすべてを語る。

文 | 兀食
写真 | 沈烈毅

長いあいだ、死と闇、そして時間の切迫感は、沈烈毅（シェン・リエイ）の心に影のように存在しつづけ、不安と焦燥を生み出してきた。その時間は、彼が幼い頃に意識を持ちはじめたときに始まり、終わりはいまだ訪れていない。

いまや彼は五十歳に近づき、「鏡を見るたびに白髪が増えている」と笑う。死については、かつてよりもずっと受け入れられるようになった。だが、芸術と生活の均衡をとることには、いまだに自在ではない。そのため、不安は本能のように彼の身体と思考を縛りつづけている。ただ創作に没入するときだけ、その不安はかすかに溶けていくのだ。

「一」

沈烈毅（シェン・リエイ）の記憶の中で、いちばん消えないのは、八歳のとき「水に溺れかけた」日のことだ。その日は、ちょうど毛沢東の追悼式の日でもあった。その一日にして、死は彼の世界に衝突し、姿をあらわした。

家の裏には京杭大運河の支流が流れていた。当時、彼は一人で農船に乗り、水遊びをしていた。川の向こうには姉の学校があり、四階建ての建物の廊下には、多くの生徒たちが追悼式に並んで待っていた。しかし沈烈毅は船の上にとどまり、廊下の生徒たちに向かって得意げに体を揺らしていた。そのとき、うっかり船から転げ落ち、川に落ちてしまったのだ。



沈烈毅（最後列左から6番目、濃い色の服を着ている）

小学校卒業写真

彼の体は水中に沈み、恐怖により一時的に記憶が飛び、どのようにして船のへりにつかまったのか思い出せなかった。水中で目を開けると、目の前に広がっていたのは、船体が川面に落とす闇との直視だった。しかし船の周囲には、なお光が残っていた。その瞬間、川は自らの力で、自然と生と死の間にある神秘を彼に語りかけてきた。

彼は、流れの中にあるかのような大きな闇を見つめ、必死にもがき、あらゆる叫び声は喉の奥に押し戻されていた。川の向こう岸では、一部の生徒たちが騒然とした声を上げ始め、沈烈毅は水中にいながらも、誰かが姉に向かって叫ぶ声を聞いた「弟が川に落ちたよ」

彼は通りかかった船に救われ、家に運ばれた。母親が駆けつけたが、叱ることはせず、ただ慌てて服を着替えさせ、追悼式に連れて行った。その間、沈烈毅の思考は完全に停止していた。彼の記憶をわずかに呼び覚ましたのは、周囲の人々が死にもの狂いで泣き、一部の人は運ばれていく様子だった。

この出来事の記憶は、死から始まり、死で終わった。

「二」

長年の後、彼が抱いた信念はこうだ：「どんな創作について考えるときも、‘水’はいつも無意識のうちに私の思考に入ってくる。」

「ほとんど溺れた経験」を除けば、沈烈毅（シェン・リエイ）は幼い頃から自然への畏敬の念を抱いていた。嵐が近づくたび、彼はテラスに立ち、近くの高い樹木が風雨にしなり、やがて再びまっすぐに戻る姿を眺めるのが好きだった。頭上では、石綿の瓦を大雨が打ち続ける音が響き、「それには大きな衝撃を受けた」という。

梅雨の季節には、運河の水位が上がり、時には道路や通行人の足首まで水が浸かることもあった。沈烈毅はそこに立ち止まり、川の果てを見つめることが多く、まるで海の広さと力を目の当たりにするかのようだった。

この畏敬の念は、彼の生活や創作の中に明確な脈絡として現れている。私が「天人合一」についての考えを尋ねると、彼は笑ってこう言った：「振り返ってみると、以前の自分はちょっと高すぎたかな。」現在の彼の理解では、自分を「天人合一」の状態に置くのではなく、それを**“自然の本性”**として捉えている。

彼の作品もまさにこの自然の本性を体現し、鑑賞者が自身の内面に没入できるように試みている。



『雨』：山西黒花崗岩
165×123×70cm, 2001

「雨」シリーズの最初の作品は、2001年に始まった。当時、彼は中国美術学院が主催した第2回西湖彫刻展に参加していた。展覧会のテーマは**「時は歌のように」であった。沈烈毅はここで「記憶」**の意味を体感し、そこから想像が生まれ、「雨」というコンセプトに至った。

「雨」は常に彼の記憶に漂っており、このとき柔らかな光を放った。間もなく、雨の模様のモノクロ写真を目にした瞬間、幼少期から空から落ちて大地に溶け込む雨の光景が呼び覚まされ、過去の感情が包まれるかのように感じられた。彼はこれを表現することを決意した。

彼は水の波紋を再現するため、硬い花崗岩を選んだ。柔らかな雨が岩に「落ちる」とき、瞬間的な凝結が鑑賞者の思考も止める。次の瞬間、水は周囲に広がる模様となり、鑑賞者の思考も共に流れ始める。

今日に至るまで、この作品は孤山公園に置かれている。沈烈毅が最後に訪れたとき、低い石は人々にベンチとして使われ、高い石はテーブルとして使われ、卵の殻や飲み物の跡が残っていた。石の周囲では、落ち葉やアリがそっと揺れていた。

これが沈烈毅の初志である。人々が彼の作品と関わり、参加者となり、その存在の一部となることを願っていたのだ。「これが、私が公共芸術に偶然初めて触れた瞬間でもある」



この話になると、沈烈毅は突然笑った。「その後私が制作した多くの作品には『座る』要素が入っていて、要するにお尻の下にある作品です。」

数年後、彼が杭州萧山空港のために制作した**『長堤一痕』と『湖心亭一点』**も、水に関わる作品であった。水はここで、一種の連続性を示すものとなった。

空港側は当初、観賞用の彫刻だけを求めていた。しかし沈烈毅は、従来のやり方にとられない試みをしたと考えた。「杭州の文化的特性を反映しつつ、実用的なもの、人々が休めるベンチを作ります。」

彼は主催者に自身の考えを説明した。空港の移動感、杭州の絹織物文化における梭（シャトル）、航路図の交差、シルクロードの縦横を一つにまとめ、公共の場に適した作品を作ろうとしたのである。制作の過程で、彼は偶然張岱の詞に出会った。「天と雲と山と水、上下白一。湖上の影は長堤一痕、湖心亭一点、我が舟は一芥、舟中の人二三粒にすぎず。」これに触発され、西湖の山水も作品に取り入れ、最終的に**『長堤一痕』と『湖心亭一点』**という二つの作品が生まれた。



『長堤一痕』：竹／ステンレス鋼
590×120×60 cm, 2012



2016年、G20首脳夫人団が中国美术学院を訪れた際、沈烈毅の作品**『湖心亭一点』**に座って集合写真を撮った。

沈烈毅は、橋をテーマにした作品も制作している。赤い橋は土地と川を横断し、その中央部分は意図的にねじられており、時間のトンネルや人間のDNAの鎖を思わせる。

彼にとって「橋」は、人間と自然の関係を最もよく表すものである。その意味は自然を征服することではなく、自然に従うことにある。かつて河川が人間の行動を阻んだとき、先人たちは川を埋めることを考えたのではなく、木橋や石橋を架けたのである。人は橋を歩き、川は橋の下で流れ続けた。

現代では、人々はさまざまな技術手段を使って自然を征服・操作しようとしている。沈烈毅は自然への生来的な畏敬から、技術に対して懸念を抱く。彼は自分自身や他の人々に問いかける：「この橋を渡った後、あなたは以前のあなたでいられるだろうか？」

沈烈毅は常に、自身の作品の中で禅の境地を追求してきた。以前、私は彼に尋ねた：「禅宗文化において、作者の自我意識は存在し得るのでしょうか？」

その時、彼は答えなかった。

再びこの質問をしたとき、彼はこう言った：「実はぜひ直接あなたと話したかったんです。私は禅を深く研究しているわけではありませんが、あなたの言っていることはまさに私が追い求めているものです。今の私の作品には確かに個人的な限界や幅があります。昔の言葉でいう『巧みすぎて自然を超える』とか『神がかりの筆』というのは、まるで自然に生成されたかのような作品のことで、作者の自我意識は存在しないかもしれません。そしてそれによって、人はより多くのことを悟ることができるかもしれません。自然のものが含むものは、やはり最も多いのです。」

彼はさらにこう言った：「あなたのどんな描写も、自然より豊かになることは決してありません。」



『舟』：山西黒花崗岩
500×90×85 cm, 2012

このため、彼は時に自身の作品を過度に説明することを避ける。常に、観念を次々と押し付けるような作家にはなりたくないと思ってきた。ある意味で、造形芸術は詩のようなものであり、その詩的な本質は言葉にされない部分にこそ宿る。

時に、作者自身の解説は作品を制約するだけでなく、観る者の想像力をあらかじめ編まれた網の中に閉じ込めてしまうこともある。これにより、本来広がるべき想像力が失敗に終わってしまう。

「観客自身に作品との対話をさせ、自ら理解することを促す。」これが沈烈毅の初志である。「もちろん、より抽象的な作品においては、適度な解説が理解のきっかけになることもある。」

「三」

十七、十八歳の頃、沈烈毅は「アーティスト」という概念をまったく持っていなかった。青年期に想像していた自分の姿は、現在のそれとはまったく異なるものだった。その当時、彼は単に芸術を生計を立てる手段**として考えていた。

彼の両親は杭州シルク印染聯合工場で働いていた。工場の多くの人々は浙江美術学院（現中国美術学院）を卒業し、印染のデザインに従事していた。「労働組合の福利として、時間を割いて私たちに絵を教えてくれる人もいた。子どもたちが休暇中に外で遊びまわのを防ぐためでもあった」と沈烈毅は回想する。彼はさらに、絵を描き始めた最初の記憶を思い出した。「学校に行く前、家に一人で閉じ込められていたこともあった。姉はよく学校で黒板に使うカラフルなチョークを持ち帰ってくれた。私はそれで庭のコンクリートに自由に落書きをした。軍艦も描いたし、太陽も描いた。」

大きくなってからは、自然な流れで美術学院を受験することになった。しかし、入試までの道のりは決して「順調な流れ」ではなかった。



『園 II』：樹木／鉄
60×300×30 cm, 2011

最初の一年、彼は自分が準備できていないと感じ、「試験を受ける勇気がなく、少し落ち込んでいた」。両親は彼の人生に計画や制限を課すことはなく、「まともな仕事を見つける」や「できるだけ早く受験する」といった考えは一時的に先送りできた。その後、彼は同級生の兄の文化ステーションで、油紙版画や雑誌制作の手伝いをした。

二年目には、受験票を手に入れられなかった。この間、昼は南山路で絵を学び、夜は**杭州大学（現・浙江大学）**で文化科目を学んだ。毎回絵を描き終わると、急いで家に戻った。自転車を全速で漕ぎ、他の自転車をすべて置き去りにした。風が彼の周囲で絶えず旋律を奏で、夕方の光が道全体に広がった。

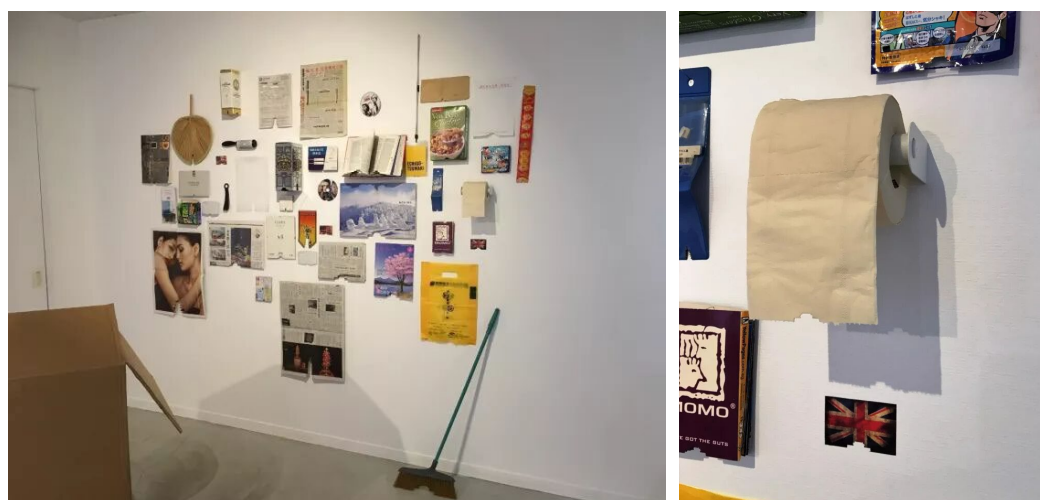
当時、両親は技術者として四川に派遣され、姉は結婚し、兄は深圳で働いていた。家に帰ると、彼は一人で適当に料理を作って食べた。食後、再び杭州大学に向かう。数か月後、「栄養もあまりなく、体はとても痩せていた」。

その後、ある教師が彼の色彩感覚の鋭さに気づき、無償でスタジオに招き、絵を学ばせた。しばらくすると、その教師は彼に言った：「素描が得意ではないね。美術学院の彫刻科に紹介して素描を学ばせよう。」

これをきっかけに、沈烈毅は絵画から彫刻へと転向した。

彫刻科では、素描や粘土造形を学び、在籍している学生に劣らない成績を収めた。先生たちは非常に面倒を見てくれ、学費も取らなかった。半年後、先生たちはこう言った：「彫刻科の受験に挑戦してみたらどうだ？」

彼の専門成績は優秀だったが、英語は1点足りなかった。希望は再び、消えそうになった。



『天空』シリーズ

「当時、僕も頑固だった。英作文が書けなければ、潔く一文字も書かなかった。実際、試験用紙の文章をひとつ写すだけでも、1点はもらえたのに。」

沈烈毅は英語に対してずっと恐怖心を抱いていた。子どもの頃は子弟小学校に通い、3年生から英語を学び始めた。彼の記憶では、英語の先生は巻き髪の厳しい女性で、しばしば生徒を叱り、教鞭で黒板を叩き、「チーン」という金属音を響かせていた。その光景は彼の頭にこびりつき、決して消えなかった。

そして今、英語の1点差のせいで、彼の受験の道は再び崩れそうになった。その後、自費での入学の知らせも届いたが、すぐに決まらなかった。他の生徒が軍事訓練を終えてから、ようやく話が進んだ。しかし、またひとつ難題が現れる。1点足りないと、1万多元を余分に支払う必要がある。90年代のこの金額は、決して小さくなかった。

「母に心配をかけないように、姉が叔父に1万元を借りてくれた」と沈烈毅は少し間を置き、続けた。「実は、僕はとても運が良かった。当時、自費の枠は限られていた。彫刻科の先生たちの認識と支援がなければ、叔父の援助がなければ、この枠を手に入れることはできず、僕の人生は大きく変わっていたかもしれない。その後も、多くの人に助けられ、ずっと感謝している。」



『空を遊び、雲と行く』
1800x600 cm, 2016

当時、国は大学生に月給を支給していた。しかし、自費生であったため、差別的に扱われた。学科の数人の先生は、自分の給料から一部を彼に回してくれた。沈烈毅は成績が常に上位で、能力を認められたため、一部の先生は外部の仕事に連れて行き、報酬の一部を与えてくれた。大学4年生になる頃には、叔父から借りたお金をすべて返済していた。

大学で唯一休暇を取ったのは、5メートルのサンタクロースを作るためだった。その仕事は、彫刻科主任の息子沈珂が紹介してくれ、1万余元の報酬が得られるものだった。沈烈毅は自宅の庭に仮設の屋根を立てた。時間が非常に限られていたため、兄、姉、義兄、父も手伝った。1週間以上かけて、ついにクリスマス・イヴの前夜に完成し、夜通しで武林広場まで運んだ。

沈烈毅は沈珂の親切を常に覚えていた。その後、沈珂は大学卒業後まもなく、万松嶺路口で事故に遭い、若い命は揺れる陽光の下で突然途絶えた。

「振り返ってみると、ただの物語だ。」

「四」

死は、再び沈烈毅の傍らに這い寄ってきた。それは常に蠢き、蓄えた力を適切な瞬間に正確に彼の体に注ぎ込もうとしていた。幸いなことに、あの八歳の時の溺水と同じく、死は今回も完全な形を取ることはなかった。

ただ違うのは、幼少期の溺水体験は死への想像と恐怖を増幅させたが、今回の出来事は彼に死を寛容に受け入れる心をもたらしたことだ。彼は死の気配を嗅ぎ取りながらも、それを散らしたり遮ったりせず、自由に流れさせた。

彼はその出来事を振り返り、こう語った：「それ以来、死についてそれほど焦燥することはなくなった。命の流れも、穏やかに受け入れられるようになった。」

この事件は2000年、彼が32歳のときに起きた。当時、彼の師匠と先輩が沈烈毅と数人に彫刻制作のために場所を貸していた。家主は収入を得るために、その隣に違法の簡易住居を設け、そこには性格の攻撃的な人物が住んでいた。彫刻制作による粉塵と騒音のため、その人物は毎日のように工商局に苦情を入れ、問題や摩擦が積み重なっていた。

やがて緊張は激化し、沈烈毅は師匠や先輩に迷惑をかけたことへの罪悪感と不安を抱き、その人物と話し合い、和解を試みようと考えた。彼はドアを叩いた——死がすでに足元まで広がっていることに気付かぬまま。

沈烈毅が口を開く前に、その人物は用意していた刃物を素早く突き刺した。彼は本能的に腕で防ごうとしたが、刃は肉を裂き、腕を貫き、さらに腹部へと突き刺さった。血は瞬く間に噴き出した。



天空_天安門：鉄
248x120x2 cm, 2012

沈烈毅は最後の力を振り絞って、その人物を制した。二人はその場で固まったまま、痛みにより沈烈毅はかすれた叫び声をあげた。近くの人がその声を聞き、駆け寄って刃物を奪い取った。

彼が古蕩（グーダン）病院に運ばれたとき、死は切迫して彼の命を飲み込もうとしていた。医師が傷を診察した後、「ここでは救えない。すぐに浙江大学第一附属病院へ運ばなければ」と告げた。

浙江大学病院に到着すると、彼は救急室に運ばれた。応急処置を受けた後、さらに精密検査のために超音波室へ送られた。

救急室と超音波室の間には、短い屋外の通路があった。その時、細かい雨が降り始め、沈烈毅は担架に横たわり、空を見上げた。雨は高空から垂直に落ち、彼の顔に軽く触れた。その瞬間、時間はゆっくりと流れるかのようで、彼は時間と生命の形をさえ感じることができた。

そのとき彼の本当の感覚はこうだった：「死への恐怖が、一気に、大きく消えた。」

「五」

しかし、これまでの不安はますます強くなり、歯車のように彼の思考をすり減らしていった。これは、彼が教師となり、さらに中国美术学院彫刻・公共艺术学院の副院長に就任してから、特に顕著になった。彼は常に時間に追われていると感じ、創作者として作品に注げる時間さえも縮小し、次第に狭まっていった。

ある期間、彼は同じ夢を繰り返し見た。その夢の中で、彼は殺人を行っていた。逃げる先に行っても、「どこも殺した人の場面だった」。夢が繰り返されるうちに、現実と幻想の区別がつかなくなり、現実に関自分が本当に人を殺したのではないかとさえ思うようになった。彼は現実を何度も振り返り、自分の「無実」を確認し続けなければならなかった。

「この夢は、おそらく私の不安と緊張が原因だろう」と彼は言った。

彼は「これらの矛盾をバランスさせることができず、一つの問題に一つずつ向き合うしかない」と語った。また、自分には確実に先延ばし癖があると笑い、創作以外のことは「切迫した状況にならない限り手をつけない」とも。

しかし、この矛盾と不安こそが、彼に自身の内面を見つめ、平穩と落ち着きを求めさせる原動力となった。この内省はまた、彼の作品に生命や本質についての考察を与えている。人々が彼の作品の前に立つとき、「複雑な思考から離れ、静かに自分自身と周囲のすべてを感じ取ってほしい」と彼は願っている。





沈烈毅アトリエ内景

教師という職業が彼の多くの時間を占めていたにもかかわらず、彼は「教育と創作は相互に補完し合うものだと考えている。特に創作の授業では、学生との交流が双方に刺激を与える。何しろ、芸術創作とは人の心と心が通じ合うプロセスそのものだからだ」と述べている。

授業では、彼は学生に「罨」を仕掛けるのが好きだった。学生がその罨に落ちて、自らの思考でそこから抜け出すことができれば、洞察を得ることができる。もしできなければ、彼は創作の過程で生まれた学生の困惑や閃きを手がかりに、思考や想像力をより広げる手助けをする。

また、造形芸術は材料に対して身体で真摯に向き合う必要があると常に考えていた。そのため、彼は許江が発明した「哲匠」という言葉に共感している。彼の認識では、「広く開かれた思想と、身体を使った創作は同等に重要であり、この両者の結合こそが真の芸術を構成する。我々は思考する匠であり、手を動かすことで思考を刺激すべきだ」と語る。

材料や創作過程に真に介入せず、思考だけに頼っても、良い作品を生み出すことは困難である。



『静水流石』：木、石
1000×160×40 cm, 2013

これは彼自身に対する要求であるだけでなく、学生にも同様に求めている。「多くの学生は私のことを『厳しい』と言う。創作課題は教室外で完成させてもよいのだが、私の授業では学生は必ず教室にいななければならない。私は彼らが教室で創作する過程全体を見たいのだ。こうすることで、学生自身が気づけない閃きを発見し、適切に導くことができる。また、考えるだけで手を動かさない学生、直接的な制作体験が不足している学生を防ぐことにもなる。」

ある学生は、卒業制作の残り時間がほとんどないにもかかわらず、数本の線しか描けなかった。「三か月も考え続け、しかもその数本の線もまともに描けていなかった。」そこで沈烈毅は厳命した：教室にいなさい。丸一日いられなくても、半日はいること。どんな素材でも、どんな方法でも、自分の手で何かを作り出せ。

「その後、一連の『手を動かす格闘』を経て、彼は見事な卒業制作を完成させた。」



沈烈毅の仕事風景

私たちの会話の終盤で、沈烈毅はしばらく沈思した後、こう言った。「おそらく、いつか創作活動がより深く没入を求めるとき、私は外界の多くのものを手放さなければならないかもしれない。」

しかし、今の彼には「さらに手放す勇気」がまだ欠けている。

最近、彼は液体金属で作った「硬貨」の作品に取り組んでいる。この特定の金属は、温度が25℃を超えると固体から液体に変わる。彼はこれらの「硬貨」を低温の容器に置き、観客が自由に手に取れるようにしている。握れば握るほど、硬貨はより早く溶けていく。

これはおそらく、彼自身の現状をも映している。多くの場合、人は外的な圧力や内的な欲求によって、自らをある種の困難な状況に置いてしまう。

そこから抜け出す方法は、自己への揺るぎない信念と、外界のものを手放す覚悟にかかっているのかもしれない。